

吟遊詩人の宇宙

松田 美緒

プロフィール
1979年秋田県生まれ。歌手。2005年に「ア
トラネイカ」でデビュー。2014年のCD「フ
ク・クレオール・ニッポン」うたの記憶を旅する
で文藝春秋「日本を代表する女性120人」に選
ばれる。2017年、本館研究公演「めばえる歌
——民謡の伝承と創造」に出演。世界各地のミュー
ジシャンと共演、アルバム制作を重ねている。

六月、最近二緒にお仕事をしている土取利行さん
がインドの吟遊詩人のパルバティ・バウルさんと郡
上八幡で共演すると聞き、京都からかけつけた。バ
ウルはインドのベンガル地方で古代から続く行者の
伝統であり、宗教の境を超越し、歌と踊りで門付け
をする人たちだという。数少ない女性バウルである
パルバティさんは、ある日タゴールが創設した音楽
院に向かう電車の中で一弦琴（エクタル）をつま弾き
歌う盲目のバウルに出遭い、衝撃を受け、バウルと
して人生を歩む決意をしたという。彼女の本は日本
語でも出版され、これまで外から覗かれ描かれただ
けだったバウルの世界を内側から世界に知らしめた。
また、近年、八世紀の仏教詩をバウルの歌として甦
らせている。

さて、郡上八幡のお寺でのコンサート当日、リハー
サルで彼女が発した歌声は衝撃的なものだった。永
遠に伸びるかのようなロングトーン、恍惚としたエ
ネルギーの奔流、波打つ旋律。エクタルの鈍い金属
弦の響きとドゥギという太鼓によって音の磁場が作
られ、そこに加わる土取さんの優美な弦楽器エスラ
ジが聖地を作り出していた。世界中にある恋愛や
自然の営み、喜怒哀楽を歌う歌とも、他人を祝福
する芸とも、まったく別の次元を見せられてしまっ
た。それは天界のありがたい宗教音楽でもない。き
れいごとでない生身の存在が、無限に達するための
歌である。声はひとすじの道のように巡回しながら

詩をなぞる。彼女がここまで音を伸ばすべき詩があ
ること、その詩は歴代のバウルの導師たちが修行の
体験によって会得した智であり、真理の探求なのだ
ということ、それを生み出したインドの永く重層的
な時の流れがそのまま押し寄せるかのごとく、しば
し激流に心身をさらした。「祈り」や「宗教」とい
う言葉も表面的に思えてくる。神にすがるのではな
く、知識で理解するものでもなく、行によってこそ
真理を探し求める。そして、踊りや歌こそが行である。

「詩を歌い踊ることはバウルにとって途切れ
ることのない瞑想の旅路を歩むことと同じな
のです」（パルバティ・バウル『大いなる魂のう
た』佐藤友美訳、「バウルの響き」製作実行委員会、
二〇一八年）

パルバティさんにバウルは何をうたっているのだと
かと尋ねると、unconditional love（無条件の愛）と
答えた。この愛は compassion（憐れみ）であると。
西洋キリスト教的なイメージを持つこうした言葉
もその歌を聴くとまったく違った次元で迫ってくる。
原初の一弦楽器、エクタルは unity（統合）を表すの
だという。二元性の世界を超越した統合の響きなの
だと。音楽も名づけられ切り売られる消費社会の
真つただ中であって、彼女が垣間見せてくれた吟遊
詩人の宇宙に心揺さぶられた。

月刊 みんな

10月号目次

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
吟遊詩人の宇宙
松田 美緒 | 12 | みんなく Information |
| | 特集 門付け再考
——家を訪ねる芸能の諸相 | 14 | 想像界の生物相
カワウソ老いて河童になる？
卯田 宗平 |
| 2 | 現代に生き続ける門付け芸能
神野 知恵 | 16 | 新世紀ミュージアム
国立台湾美術館
相良 啓子 |
| 4 | 歴史を重ねる伊勢大神楽
黛 友明 | 18 | シネ倶楽部 M
冒頭数分の挑戦
——「少女は自転車にのって」
菅瀬 晶子 |
| 5 | 福を運ぶ三番叟まわし
辻本 一英 | 20 | ながなんちゃ
霧の中の出会い
——複数の名前をもつ人びと
石倉 敏明 |
| 7 | 死者と生者をつなぐニムチャー衆
——八重山・小浜島の旧盆
酒井 正子 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 春を呼ぶ黒森神楽
遠藤 協 | | |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
社会主義期の音を聞く
八木 風輝 | | |